

図書だより

最上校図書委員会
No.9 9月1日

山形県出身在住作家特集 長岡弘樹展

筑波大学を卒業後、団体職員を経て、「陽だまりの偽り」で、単行本デビューする。2013年に刊行した「教場」は警察学校を舞台にした新しいタイプの警察小説で、映画化にもなった。今でも、山形市に在住して執筆活動をしている。



「つながりません スクリプター事件 File」 最新刊

「緋色の残響」

シングルマザー刑事の羽角啓子と新聞記者を志す一人娘の菜月が活躍する連作5編。

「119」

怖がるなどとは言わない。だが、恐怖を他人に感染させるな。消防学校時代の担任教官が、たった一度だけ口にした言葉がいまでも忘れられない。人を救うことはできるのか？和佐見消防署消防官たちの9つの物語。

「救済」

その行為に「救い」が？心を揺さぶる6編。

「道具箱はささやく」

緻密な伏線、鮮やかな切れ味、驚きと余韻の残る結末。短編の名手が挑む18編。



「にらみ」

刑事が公判を傍聴し、被告人が供述を翻したりしないよう、無言で圧力をかけること。

「血縁」

親しい人を思う感情にこそ、犯罪の盲点はある。誰の身にも起こりうる事件をあっと驚く事件に仕立て上げた珠玉のアイデアミステリ7編。

「時が見下ろす町」

かなり凝った構成の連作短編集。一作ずつは単独作品として読めるのだが、全体通していくつか共通点がある、リンク型の短編集8編。

「白衣の嘘」

この結果は見抜けない！鮮やかな謎と予想外の結末。ミステリファン必読、医療ミステリ短編集6編。

「赤い刻印」

辛い現実さらされた人間たちの謎めいた行動と、その先に待つ一筋の希望を描いたミステリ4編。

「群青のタンDEM」

警察学校での成績が同点で一位だった、戸柏と陶山。なぜ二人は張り合い続けるのか？異色の警察小説。

「波形の声」

トリック重視とも受け取れるほどの硬い文章と描写のギャップに、戸惑いを覚える。短編7編。

「線の波紋」

誘拐された少女は、その家で何を見たのか？

「傍聞き」

どの物語もトリックのアイディアがユニークで、人物の心理をうまくついた仕掛けは、新鮮な驚きをもたらす4編。

「陽だまりの偽り」

2005年、単行本、デビュー作。

